

徳永瑛子 論文内容の要旨

主 論 文

Relationship between parenting stress and children's behavioral characteristics in Japan

日本における育児ストレスと子どもの行動特性との関連

徳永瑛子、岩永竜一郎、東恩納拓也、山西葉子、田中浩二、中根秀之、田中悟郎

Pediatrics International, 2019 (in press)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻
(主任指導教員：田中悟郎 教授)

緒 言

育児中の両親を支援する際、両親それぞれの育児ストレスを評価すると同時に両親が子どもの行動特性をどう理解しているのかを評価する必要性は高い。育児ストレスと子どもの行動特性との関連についての報告は複数ある。両親は子どもの行動特性について重要な情報を持ってはいるが、子どもの障害の有無に関わらず、両親間で評価が異なる傾向があることが報告されている。しかし、育児ストレスと子どもの行動特性に関する日本の定型発達児を対象にした報告は少なく、更なる研究が求められている。

そこで本研究は、日本の就学前定型発達児に対する父母の育児ストレスと子どもの行動特性との関連を明確にすることを目的に実施した。

対象と方法

長崎市内の3幼稚園と3保育園に通園している就学前の子どもをもつ父母485名を対象に自記式質問票調査を実施した。調査項目は、基本属性（自身の年齢、子どもの年齢、性別、家族構成）、育児ストレス（Parenting Stress Index short form: PSI-SF）36項目、子どもの行動特性（Strengths and Difficulties Questionnaire: SDQ）25項目であった。調査期間は2013年12月から2014年5月であった。

結 果

父親122名（回答率25.2%）、母親204名（回答率42.1%）から回答があった。欠

測値がある者と子どもに何らかの障害があると回答した者を除外し、父親と母親ペアでの回答が得られた 83 ペアを分析対象にした。行動特性を親によって評価された子どもの平均年齢は 59.1 ± 13.0 ヶ月で、性別は男児 36 名 (43.4%)、女児 47 名 (56.6%)、出生順位は第 1 子 47 名 (56.6%)、第 2 子 28 名 (33.7%)、第 3 子 8 名 (9.6%)、同胞の有無は有り 65 名 (78.3%)、無し 18 名 (21.7%) であった。父親の平均年齢は 37.9 ± 6.3 歳、母親の平均年齢は 35.1 ± 4.9 歳であった。

父母間の育児ストレスに関しては、子どもが男児の場合、母親のストレスは父親よりも高い傾向 ($p < 0.1$) であったが、有意差は見られなかった。

父母間で子どもの SDQ を比較した結果、TDS (Total Difficulties Score) ($p < 0.05$)、多動・不注意 ($p < 0.01$)、仲間関係 ($p < 0.05$) の項目で、父親は母親よりも有意に高かった。

PSI-SF を従属変数、子どもの性別と年齢、同胞の有無、親の年齢、SDQ の各項目を独立変数として、父母別に重回帰分析を行った結果、父親の PSI-SF の総スコアは、多動/不注意 ($\beta = 0.403$, $p < 0.01$) と有意に関連していたが、母親 PSI-SF の総スコアは、情緒 ($\beta = 0.215$, $p < 0.05$) 及び仲間関係 ($\beta = 0.272$, $p < 0.05$) と有意に関連していた。

考 察

本研究は就学前定型発達児に対する父親と母親の育児ストレスとそれに関連する子どもの行動特徴について調査した。本研究では父母間の育児ストレスに有意差は見られなかった。先行研究によると対象となる子どもの年齢や障害の有無などにより両親の育児ストレスは変動するが、概ね定型発達児の場合は両親間の差は小さく、本研究の結果を支持していると考えられる。次に、父親の育児ストレスは子どもの客観的に観察できる外在化された行動 (多動、不注意等) と有意に関連していたが、母親の育児ストレスは子どもの周囲の人々との対人関係と情緒など子どもの内面を示す行動との有意な関連が認められた。この結果より、父母間で育児ストレスと関連する子どもの行動特性が異なることが示唆された。従って、父母へ育児に関する支援を行う際には、父母間で異なる支援の方法を検討することも必要であると推察された。